



© USUI COLLECTION

有田焼がオランダ本国へ渡って 350 年！

今年、2009 年は長崎に商館を設けたオランダ連合東インド会社が本格的に有田焼をオランダ本国へ輸出して 350 年という、記念すべき年です。このころの取引の記録はオランダ商館の仕訳帳などにあります。

その年、万治 2 年 (1659)10 月 5 日、長崎から出航した VOGELZANG 号には 5,748 個の有田焼が載せられ、オランダ本国宛てに送られました。その内訳は次のようなものでした。

白磁や色絵の茶碗 1,500 個、碗 196 個、鉢 604 個、皿 2,120 個、バター皿 830 個、三つ揃い平鉢 300 個、色絵瓶 50 個、壺色々 100 個、卓上用塩入れ 10 個、卓上用芥子入れ 10 個、インク壺 10 個、酒を温める鍋 10 個、色絵重箱 5 個、鶴置物 3 個。

これらは前述のように、長崎商館長ザハリアス・ワーヘナールが発行した送り状によって確認できます。

これを記念して、今年秋から来年にかけて、全国で「日本磁器ヨーロッパ輸出 350 周年記念 パリに咲いた古伊万里の華」展 (主催：開催各美術館、日本経済新聞社) が巡回開催されます。出品作品はパリの碓井コレクションの中から選りすぐりの作品 165 点です。パリ在住の碓井文夫氏は日本から輸出された古伊万里の優品をパリを中心に欧州で収集され、その所蔵作品が一堂に公開されるのは国内外を問わず、今回が初めてです。

その内容は、典型的な古伊万里作品に加えて、当時のヨーロッパ王侯貴族の生活文化や趣味を反映したさまざまな形やデザインのものが見られるのが大きな特徴です。

この企画展では、監修に当たった大橋康二氏 (有田町文化財保護審議会会長・前九州陶磁文化館館長) によって、碓井コレクションを 3 つに分けて展示されます。

I 欧州輸出の始まりと活況

(寛文様式 1660 年代)

II 好評を博した日本磁器の優美

(延宝様式 1670～1690 年代)

III 宮殿を飾る絢爛豪華な大作

(元禄様式 1690～1750 年代)

これら、3 つの様式に分けられた碓井コレクションは、その保存状態の良さやセットの作品が完全な状態で収集されていることとともに、質の高い作品が多いことから、高く評価されているものです。

残念ながら、佐賀県内や有田町での展覧会は予定されていませんが、下記の三ヶ所で開催されます。近くでは、福岡県太宰府市にある九州国立博物館で開催予定です。ぜひ、足を運んでみてください。

国内では見る事ができない作品の数々に触れ、有田の先人たちが作り上げた、その芸術性や技術の高さを再認識することは、これからの作品づくりにきっと役立つものと思います。

なお、国内の開催予定は以下の通りです。

東京都庭園美術館

2009 年 10 月 10 日～12 月 23 日

九州国立博物館

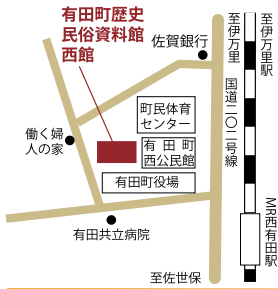
2010 年 4 月 6 日～6 月 13 日 (予定)

MOA 美術館 2010 年 7 月中旬～9 月下旬

皿 季刊 山

No.82

夏
2009



大山小学校 3年生の 西館見学記



熱心に話を聞く子どもたち



スケッチをする子どもたち



民具に触れる子どもたち

西館にはたくさんの民具が展示してあります。特に農具は充実しており、旧西有田町が農業の町であることがわかります。その中で、農業や山仕事などの生産に関わる道具だけでなく、日常生活の中で使われた物もあります。鍋や釜などの調理具、醤油を絞った醤油籠やコンニャク杵、照明器具の石油ランプ、火のしや炭火アイロン、暖房具の炭火の行火、陶製湯たんぽ、ブリキ製湯たんぽ、餅をついた臼と杵、衣類を収納した長持など挙げれば切りがないほどの民具が展示してあります。

この昔の生活に使った道具を調べるために3月17日、大山小学校の3年生2クラス53名が来館しました。3年生の社会科では、「むかしの暮らし、いまの暮らし」という学習項目があり、古い道具を使っていたころの暮らしは、今とどう違うのかを学習することになっています。校外での学習と言うこともあって、児童たちは元気がよく、眼が輝いています。展示資料の概略を一通り説明し、あとは自由に観察する時間にしました。児童たちは興味のある資料をスケッチしたり、その他の道具はどのように使ったのかを質問します。同時に3～4名の児童が質問したりすると、大変ですが、うれしい悲鳴をあげます。

通常の見学では展示資料に触れることはできませんが、小学校の校外授業の時には特別に触ってもよいことにしています。その代わりに児童たちと約束をします。①資料を壊さないこと ②もとにあった場所にもどすこと ③持って帰らないことの3つです。そして、他の博物館や資料館では展示資料は絶対に触ってはいけないことを教えます。

スケッチしたり、資料の名称や使い方を尋ねたり、手にとって観察する児童たちは、喜々として館内を動き回っています。やがて見学の時間は終わり、お礼を言って帰って行きます。児童たちが昔の暮らしがどうであったのかを理解したのか少しばかり不安でしたが、後ほど教務主任の古川美樹先生と話す、「これは何につかったのかな。」「昔の人はいろいろ工夫をしていたんだ。」と感想を口々にしていたそうです。蛇口をひねれば水が簡単に飲め、ボタンをおせば部屋が温くなる。そんな今の世は、先人のたゆまぬ努力の積み重ねで出来ていることを少しは理解してもらえたようです。

(宮崎光明)

時を切り抜く

有田町歴史民俗資料館では古い時代の有田を撮影した映像・写真を多数収集し、保存しています。これらは時代の一コマでもあり、ともすれば忘れていた記憶を呼び戻す機会を与えてくれるものです。

右の写真は昭和42年7月9日、梅雨前線と熱帯性低気圧による豪雨が甚大な被害をもたらした、いわゆる「42水」の広瀬山地区の被害状況です。



皿山の備忘録

～ 有田焼の創業祭 ～

来る平成28年、7年後には有田焼創業400年を迎えます。過去、有田町では大正5年の300年祭、昭和41年の350年祭と、町をあげて祝ってきました。また、旧曲川村の時代には、昭和28年に柿右衛門300年祭を、曲川村公民館を中心に行っています。

大正5年5月3日の「有田町役場日誌」によれば「故李参平三百年祭執行並びに之れが記念事業として陶磁器市場開始の件につき議員・区長協議会開催」し、さらに5月24日には陶祖李参平記念碑建設委員会が開催され、2年後の大正7年5月4日、記念碑の除幕式がありました。

このことを紹介した佐賀新聞の記事によると、当日は来賓の大芝佐賀県知事以下200名が雨の降りしきる中、陶山神社裏手の山上に登り、末裔の金ヶ江儀平氏が除幕をしています。碑は周防徳山産の花崗岩で、台高二尺五寸(約75cm)、棹丈一丈三尺(約3m33cm)、題字を鍋島直映氏、碑文は千住武次郎佐賀中学校長の撰にして、総工費6,850円はすべて寄付によったとあります。当時、1.8リットルの日本酒が2円のころのことです。さて、今の金額にしたらいくらぐらいになるでしょうか？

ちょっとした話題

最近、当館の玄関には季節の花が生けられています。それは来館者が最初に目に入る場所にあり、周囲の豊かな自然とともに、当館の“顔”となりつつあります。



この花は有田町役場OBの百田節子さんがボランティアで、毎週のように自宅や知り合いの方からいただいたものを運び、生けていただいているものです。

研修旅行に行ってきました



伊藤伝右衛門邸を見学する受講生のみなさん

3月16日(月)、古文書教室受講生28名は、福岡県飯塚市への研修旅行を行いました。飯塚市には石炭王と呼ばれた伊藤伝右衛門氏の養嗣子に、町内出身で深川製磁の深川艶子さんが嫁いでいます。伊藤伝右衛門さんといえば前妻・白蓮さんとの華々しい艶聞のほうが有名ですが、筑豊地方での炭鉱開発や、教育関係を中心とした地域社会への資産の還元などの功績でも歴史に残る人です。

有田皿山では伊藤家との縁で、戦時中の物資不足の時代に良質の石炭を入手し、焼物の焼成に寄与したといわれています。今回の研修旅行では、株式会社麻生の顧問で前飯塚市歴史資料館長・深町純亨氏に案内していただき、飯塚市歴史資料館、嘉穂劇場、伊藤伝右衛門邸などを見学しました。

蒲原コレクション オリジナルフレーム切手 期間限定で発売中！！



このほど、郵便局株式会社九州支社により、有田町所蔵の古伊万里「蒲原コレクション」(九州陶磁文化館で常設展示中)のオリジナルフレーム切手が発売されました。

「町史の行間」でも紹介しましたが、今年是有田焼がオランダ本国へ輸出されて350年になります。その古伊万里の代表作品ともいえる「蒲原コレクション」の中から10点を選んで、記念切手を作成したいという申し出が蔵宿郵便局(立部智成局長)からあり、九州陶磁文化館や有田町が協力し、発行ということになりました。

最近パソコンや携帯電話が普及し、手紙を書くことも少なくなってきて、もっぱら連絡は電話やメールでという人が増えてきました。でも、手紙やハガキを書くということは、その間、相手のことを思う時間があります。さらに、有田焼の切手が張られた手紙を受け取った人は、それを見て有田への思いを新たにされるかもしれません。販売期間は7月27日まで、定価1,200円で発行部数は2,100部。多くの皆様のご利用をお勧めします。

民俗技術の調査が行われました

荷師
山口正弘さん

このほど、文化庁では全国に残る伝統的な生産・生業に用いられる用具や用品等を制作する技術である「民俗技術」の調査を実施しました。

文化庁は近年、産業構造や生活様式などの変化に伴い、変容や消滅の危機に瀕している民俗技術は、日常生活の必要性から創造され、世代から世代へと継承されてきた文化的所産であり、国民生活の推移を理解する上で欠くことのできないものであり、先端的な技術の原型として、新たな技術革新のために常に翻って参照し得る貴重な伝統技術でもあると位置づけています。

今回、佐賀県内では「むつかけ漁の道具作り」や「漏斗谷造り屋根の葺き」など5件が調査対象となり、有田町では「有田焼の梱包技術(荷師)」の調査が行われました。

4月24日(金)、町内中樽在住で、以前荷師として修業をした山口正弘さん(68歳)に大皿や火鉢などの荷造り作業をお願いしました。館内には荷師の道具(大包丁・小包丁・ワラスガイなど)や荷造りの終わった形の荷俵を展示しています。また、長年荷師として活躍した故橋本勝さんの作業を撮影したフィルムも保存していますが、山口さんに実際目の前で作業をしてもらいながら、荷師としてどのように技術を習得したか、あるいは使用する素材や工程の概要などの聞き取り調査も行われました。



山口正弘さんによる火鉢の荷造り作業

今回の調査は、変容などの危機にある民俗技術の保護措置を講ずるために全国的な調査を実施し、その伝承状況を把握することを目的として行われたものですが、有田焼の歴史を語る技術の一つである、荷師さんの技です。何らかの形でこの技術が伝承される方法がないものか、これから当館でも一緒に考えていきたいと思います。

季刊『皿山』

通巻82号(平成21年6月1日)
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185